第2章 受けつがれるまち　かわさき

1 自然災害から人々を守る

多摩川の水害



◀川のそばにある水害の碑

1974（昭和49）年９月１日、東京都と神奈川県の間を流れる多摩川において、大規模な堤防決壊が発生しました。災害が発生した箇所は、河口から22.4kmの左岸側、東京都の狛江市です。堤防が決壊したことで、住宅19棟が流出しました。多摩川をはさんで対岸にある川崎市では、水をせき止めていた宿河原堰がこわれたため、取水への影響がありました。

決壊する前は、赤い点線部分まで堤防がありました。台風の影響で川が増水し、その川の水によって、堤防がどんどんけずられていきました。

▲1974（昭和49）年の水害の様子（狛江市猪方地先付近）写真提供：狛江市



川崎市にある多摩川でも大きな水害が発生していたんだね。





家が流されている。住民は無事だったのかな。

▲濁流にのまれる民家の様子　写真提供：毎日新聞社

1974（昭和49）年の水害では、どのような対応をしたのだろう

〈警察・消防・自衛隊の活動の様子〉



◀土のうを積んでいる自衛隊員

写真提供：「多摩川堤防決壊記録」p.30狛江市



◀蛇篭を設置している消防隊員

写真提供：「多摩川堤防決壊記録」p.30狛江市



◀危険な状況下で作業する警察官

写真提供：「多摩川堤防決壊記録」p.30狛江市

◀水をせき止めていた堰堤を爆破している様子

写真提供：毎日新聞社

〈昭和以降の多摩川の主な水害の歴史〉

1947（昭和22）年９月	多摩川流域ほぼ全流域に被害
1974（昭和49）年９月	堤防決壊により東京都狛江市で民家19棟が流出　浸水1207戸
1982（昭和57）年８月	川崎市などで床上床下浸水163戸　護岸被災
９月	川崎市などで床上床下浸水60戸　護岸被災
1999（平成11）年８月	川崎市戸手付近で床上床下浸水　69戸
2007（平成19）年９月	護岸崩壊、河岸浸食などの被害14箇所
2019（令和元）年10月	川崎市内各所で浸水被害

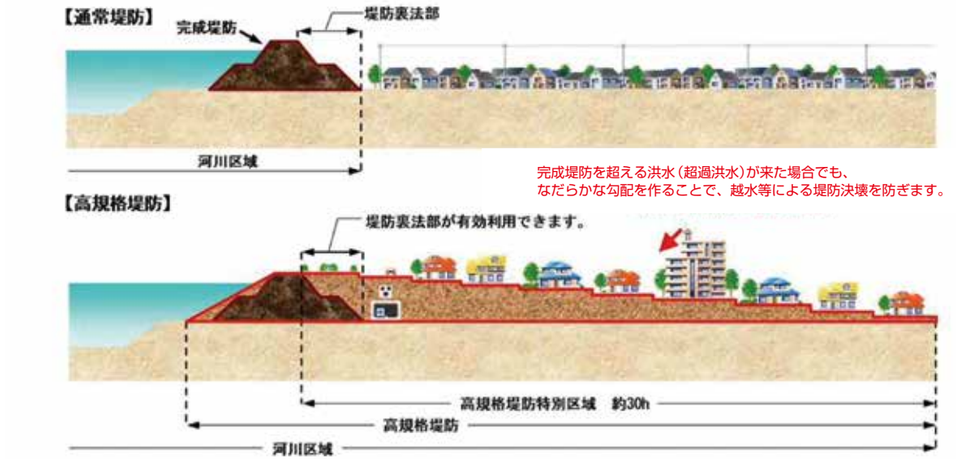
京浜河川事務所の方のお話

1974（昭和49）年の多摩川の水害では、台風の影響でふり続いた雨によって、土手や家が流される大きな被害を受けました。現場には多くの警察官や消防隊員が集まり、現場の安全を守ったり、避難ができるように救助活動をしたりしました。また、川の流れを変えるために、自衛隊と旧建設省がダイナマイトを使って宿河原堰を爆破しました。その後、堤防の緊急工事が行われ、９月14日に完成しました。

水害にそなえて国や川崎市ではどのような取り組みを行ってきたのでろう

国の備え

高規格堤防整備事業（概要）



高規格堤防は、多摩川からあふれた水が急激にまちに流れこまないような仕組みになっています。なだらかな斜面に沿ってまちを作ることで、あふれた水の勢いをゆるやかにすることができます。

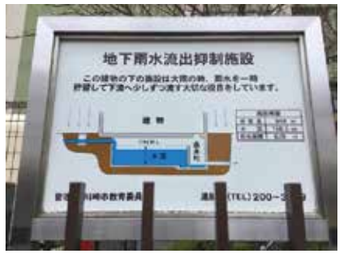


▲まちづくりと共同で実施した高規格堤防（川崎市戸手４丁目付近）

川崎市の備え



▲土のうステーション
水害に備えてまちの中に土のうステーションを設置しています。土のうが必要な場合は誰でも使うことができます。



▲地下雨水流出抑制施設
大雨の時にマンション・学校などの地下に雨水をため、少しずつ川に流しています。



▲防災無線行政スピーカー
大雨や津波などによる災害が起きそうな場合には、避難の情報などを無線放送で伝えます。いつでも使えるようにテスト放送をし、定期的に点検をしています。

消防の備え





▲【水防訓練】
消防と消防団が合同で水防訓練をしています。水の浸水を防ぐために使用する土のうをすばやく作る訓練をしたり救助のさまたげになる倒木や倒壊した家屋を切断する訓練をしたりしています。



〈高津消防署水難救助隊の方の話〉
川崎市の消防士の中でも特別な訓練を受けた人だけ水難救助隊になれます。いつ起きるかわからない水害に対して、様々な場面を想定して、訓練を行っています。

警察の備え

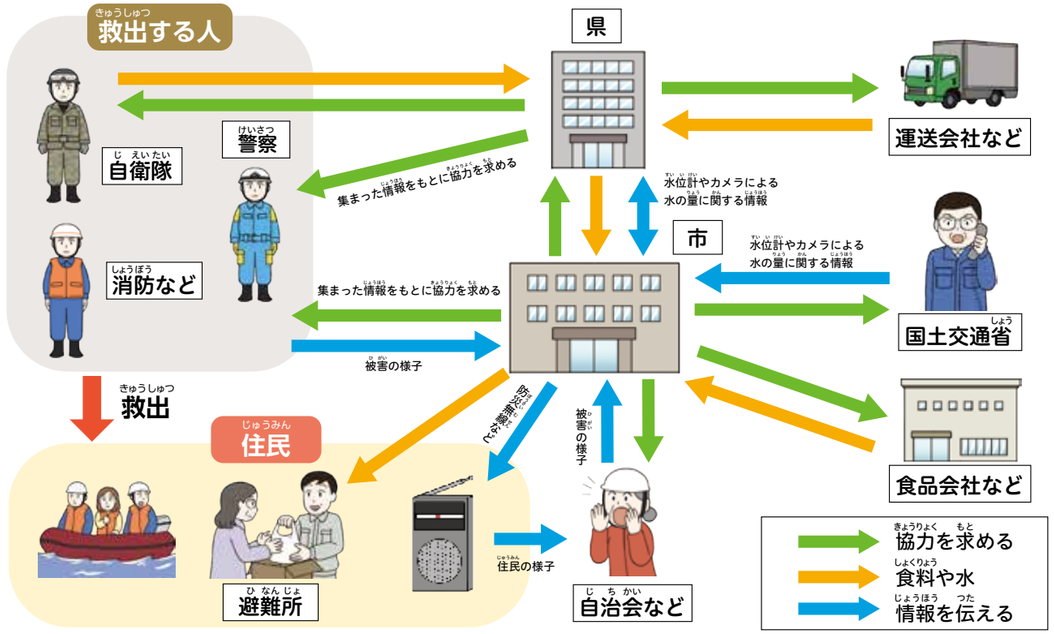
〈高津警察署　警備課の方の話〉
ハザードマップを参考にして、高津区内の危険な場所の状態を見てまわっています。水がたまりやすい場所、土砂崩れが起きそうな場所などを点検しています。高津区役所の方と一緒にまわって、確認しています。最低でも年に一回は、見回るようにしています。

区役所・まちの人達の備え

〈高津区役所　危機管理担当の方の話〉
学校を避難所として使うことになった時にあわてないよう訓練を行っています。また、地震の時は職員がすぐに避難所に行けないこともあるので、近くに住んでいる町内会の人や、学校の校長先生、教頭先生たちと一緒に、誰がリーダーになるか、誰が鍵を開けるかなどの役割を決める「避難所運営会議」を行っています。



水害から住民を守る仕組み



危機管理室の方のお話

川崎市では、水害などの自然災害にそなえて、地域防災計画を作成しています。水害の発生が予想されるときには、防災無線やラジオなどを通して、住民に避難をよびかけるとともに、災害対策本部をもうけます。災害対策本部には、市の担当者の他にも、県の担当者、消防や警察の人、国土交通省の人など関係機関の人も集まり、住民の命を守るためにそれぞれの役割にもとづいて協力して行動します。

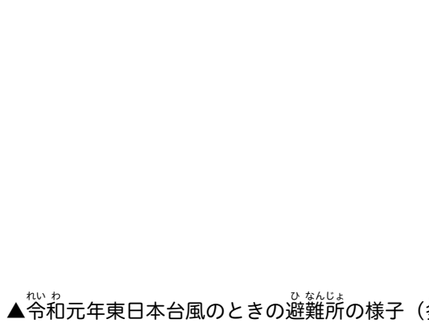
川崎市では、過去の自然災害をもとにさまざまなそなえをしたり、関係機関と協力したりしているから、わたしたち住民は安全な生活を送ることができるんだね。



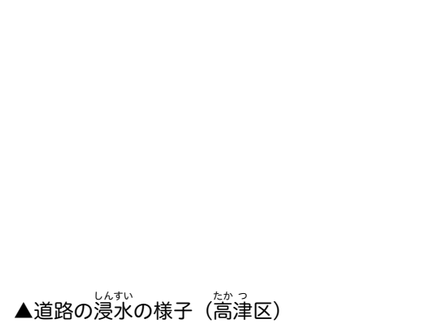
水害が起きた時、被害をへらすために、わたしたちには何ができるのでしょうか。



水害による被害をへらすために、わたしたちができる取り組み



▲令和元年東日本台風のときの避難所の様子（多摩区）



▲道路の浸水の様子（高津区）

危機管理室の方のお話

2019（令和元）年10月12日、令和元年東日本台風のときには、川崎市でも多くの道路や家屋が水につかる被害がありました。その際、多くの方が避難所に避難しましたが、避難所によっては物資が不足したり、浸水の危険のない場所に住む人まで避難していたりということがありました。水害は、地震などとはちがい、天候や川の水量の変化など事前にえることができる情報から、水害が起こる危険性を予測することができます。自分の命は自分で守るという意識が大切です。

京浜河川事務所の方のお話

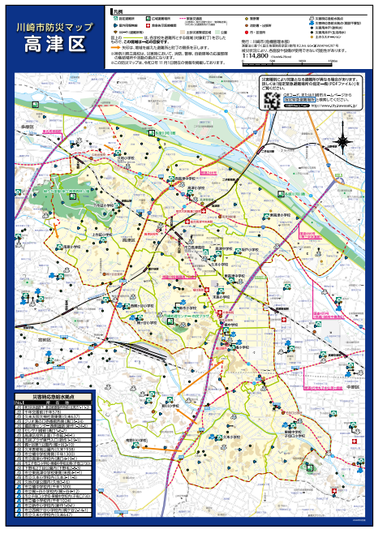
国や県、市町村だけでなく、川の流域に住む人みんなで治水対策をしていこうとする考え方を「流域治水」といいます。例えば、川の水があふれそうなときに風呂の水を流さないことも、住民にできる治水対策の一つです。なぜなら、下水の水は止めることができないからです。他にも住民にできる取り組みがたくさんあります。だれかにまかせるのではなく、ぜひ自分たちができる治水対策を考えてほしいと思います。



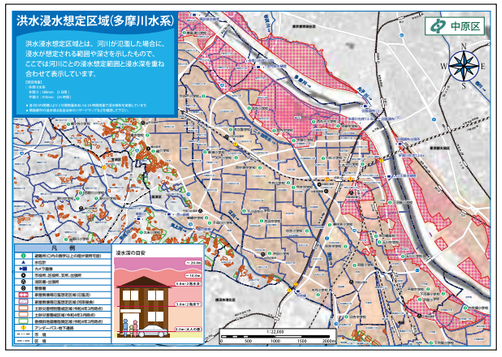
▲かわさき防災(ぼうさい)アプリ



▲防災(ぼうさい)に関(かん)するパンフレット



▲防災(ぼうさい)マップ



▲洪水(こうずい)ハザードマップ

川崎(かわさき)市や自分が住んでいる区のホームページを見ると、防災(ぼうさい)に関(かん)する情報(じょうほう)がたくさんあります。調べてみましょう。

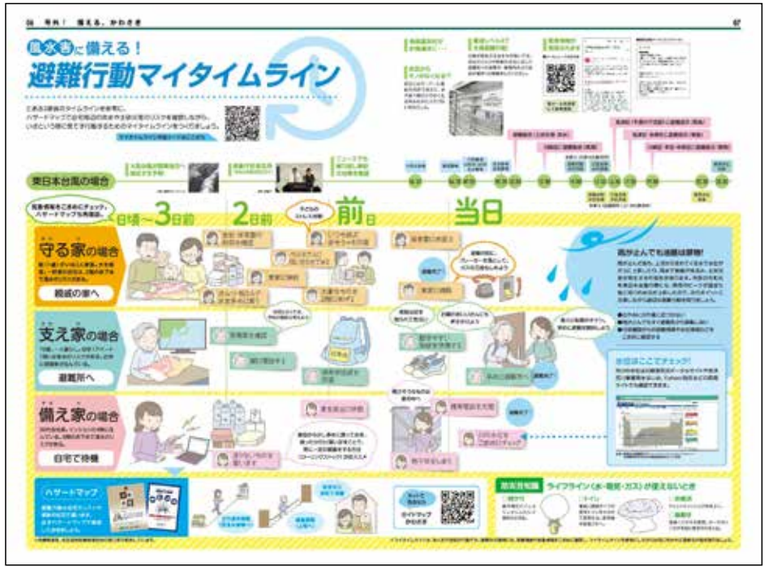


洪水(こうずい)のハザードマップ以外(いがい)にも、土砂災害(どしゃさいがい)や内水(ないすい)、津波(つなみ)のハザードマップもあるよ。自分の住んでいる地域(ちいき)の情報(じょうほう)を調べてみよう。

➡

川の様子に関(かん)するリアルタイム情報(じょうほう)（カメラ画像(ぞう)や水位(すいい)・雨量(うりょう)等）は、国土交通省(こくどこうつうしょう)・神奈川県(かながわけん)・川崎市(かわさきし)のホームページでも見ることができますよ。





危機管理室(きき かんりしつ)の方のお話

「マイタイムライン」とは、大雨や台風などの風水害(ふうすいがい)にそなえて、一人一人の家族や生活の状況(じょうきょう)に合わせた避難(ひなん)行動、つまり「自分の逃(に)げ方」を考えておくものです。避難(ひなん)する場所や避難(ひなん)するタイミング、用意するものは、家族や生活の状況(じょうきょう)によってちがいます。日ごろから考えておくことで、いざという時にあわてずに行動することができます。

水害(すいがい)による被害(ひがい)をへらすために、わたしたちにできることを考えてみましょう。



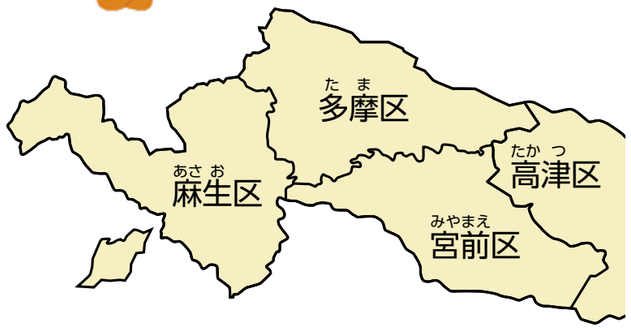
2 地域で受けつがれてきたもの

川崎市に残る歴史を伝える建物


▲子之神社本殿（多摩区）


▲白山神社本殿（麻生区）






▲日枝神社（中原区）


▲深瀬家長屋門（幸区）


▲長弘寺本堂（幸区）


▲平間寺　弘法大師道標（川崎区）




▲長念寺本堂（多摩区）


▲二ヶ領用水久地円筒分水（高津区）


▲民家園（多摩区）


▲橘樹歴史公園（橘樹官衙遺跡群）

くわしくは歴史新聞で

わたしたちの学校のそばにあるかな？
見に行ってみたいな。




▲安藤家長屋門（中原区）


▲川崎河港水門（川崎区）

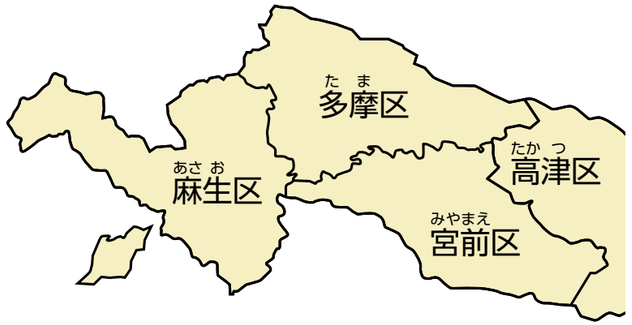
川崎市無形民俗文化財



無形民俗文化財とは何だろう？

昔から守り伝えられてきた伝統の「わざ」です。次の世代に引きつぐために、みんなはどんなことができるかな？







菅の獅子舞（多摩区）

【９月12日に近い休日】



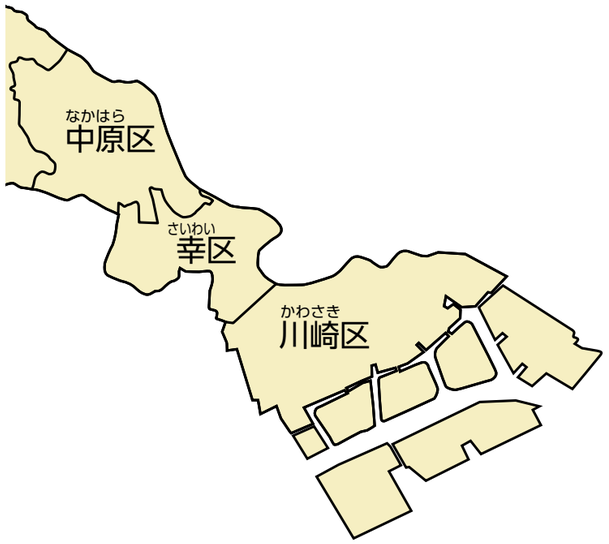
細山神明社祭りばやし（麻生区）

【１月１日】



囃子曲持（中原区）

【10月第１日曜日】





小向の獅子舞（幸区）

【８月第１日曜日】



川崎大師引声念仏・双盤念仏（川崎区）



初山の獅子舞（宮前区）

【10月第１日曜日】



禰宜舞（宮前区）

【７月20日、９月第３日曜日】



沖縄民俗芸能



川崎山王祭宮座式（川崎区）

【８月１・２・３日】

地域で受けつがれてきた祭り





▲川崎山王祭の宮座式





祭りとは？

「祭り」というと、みなさんは太鼓をたたいたり、屋台でおいしいものを買って食べたりするイメージかもしれません。しかし、日本の祭りの本来の目的は、神前におそなえをささげて、感謝といのりをささげる「儀式」です。

この神社では、毎日神様におそなえをささげ、地域の安全や平和を願っています。



川崎山王祭ってどんな祭り？



山王祭は、毎年８月に行われる年中行事なんですよ。

わたしのおじいちゃん、おばあちゃんが、小さいころ、参加していたって言ってたよ！



現在、山王祭は８月１日から例祭直後の日曜日までの間で行われます。

８月１日 宵宮祭（前夜祭）…祭３日間の無事と盛況を祈念します。

８月２日 例祭 宮座式…神主と氏子旧家の主人によって、おごそかに行われます。
その中で玉神輿には女神、孔雀神輿には男神のご神体がうつされます。
そのうつし方に古伝があり、神様の結婚を表しています。

例祭直後の日曜日　神幸祭…２体の神輿が町内会ごとに回り、祭儀を行います。

神輿（孔雀　男）



神輿（玉　女）



山王祭でかつがれる神輿は２種類あり、一つは男の神様をのせる神輿で、もう一つは女の神様をのせるものです。これらの神輿はかつぎ方も動き方もちがいます。孔雀神輿は江戸前持ちといい、神輿を上下にゆらしながら道路をまっすぐに進みます。玉神輿はせり持ちといい、道路をジグザグに動きながら進みます。

二つの神輿は、町内を回りながら新田神社へ向かい、そこで井戸からくんだ水を神輿にふりかけます。これをしないと、神様がおこって神輿が無事におさまらないそうです。新田神社を出た神輿は、また稲毛神社にもどり社殿に納められます。社殿ではすべてのとびらを白絹の幕でふさぎ、神主と社人だけでご神体を神輿からご本殿へ返す「還霊祭」という最後の儀式が行われます。

かつぎ手さんのお話

わたしは毎年山王祭で神輿をかつぐことが楽しみです。神輿は神社の前から各町内を一日かけて回ります。神輿は重たいですし、かたもいたくなりますが、毎年かつがないと調子が出ないので、町内会や近所のみんなと早く祭りの日が来ないかと楽しみにしています。たいへんなこともありますが、終わった後の達成感や神様とかかわることのできる特別感が味わえるので、これからも続けていきたいです。

この祭りをこれからも続けていくためにも、もっと多くの人たちに見に来てほしいです。残念ながら子どもは神輿をかつぐことはできませんが、神輿の下をくぐるという形で参加することができます。もちろん大人になったら、ぜひかつぎ手になってもらいたいと思っています。地元の祭りをみなさんの力でもり上げていきませんか？



わたしも、神輿をかついでみたくなったな。

これだけ長い間、祭りを続けてきたのも、たいへんだったろうね。



稲毛神社宮司　市川さんのお話

山王祭は、江戸時代から続いている祭りです。戦争の影響で社殿が焼失してしまい、一度とだえてしまいました。しかし、戦後に地域の方々が中心となり復活した祭りです。だからこそ、みなさんの健康、平和、地域の発展などを願って続けていかなくてはいけないと考えております。

続けていくためには、多くの人の理解や協力が必要です。川崎市の小学生のみなさんには、稲毛神社の祭事に興味をもってもらい、ぜひ参加してほしいですね。

大切な祭事ですので、これからも続けていき、後世に残していけるようにしていきたいと思っています。



これからも、ずっとこの祭りが続いていくといいね。

この他にも、わたしたちのまちに祭りはないかな？



3 小泉次大夫　用水を開く

小泉次大夫　二ヶ領用水を開く

下の写真は、どの流れの写真でしょうか。右のイラストからさがしてみましょう。









▼多摩川周辺のイラストマップ



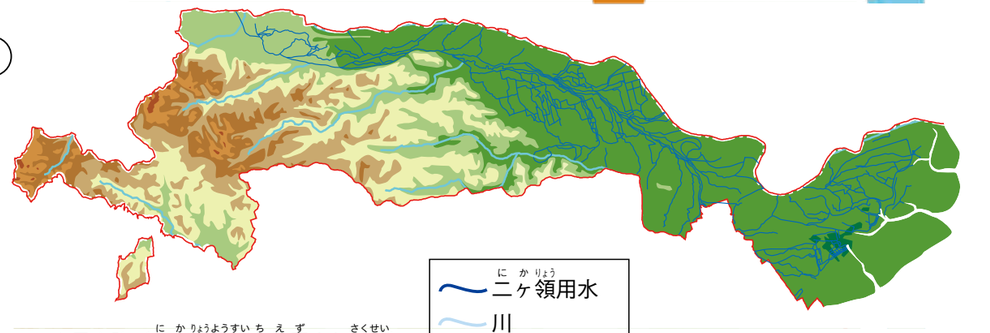
「二ヶ領用水」と書いてあるよ。「用水」ってどういう意味なのかな。辞書で調べてみよう。



二ヶ領用水は、自然の川ではないのかな。



①



▲用水路（二ヶ領用水知絵図より作成）

当時の人々は、はば約2.4m、深さ1.8mの堀を掘りました。くわで掘り、もっこに土を入れて運び上げ、左右に土手をきずいていきました。すべての用水路を掘るのに、およそ12年かかりました。

②



▲用水路を掘る様子（想像図）

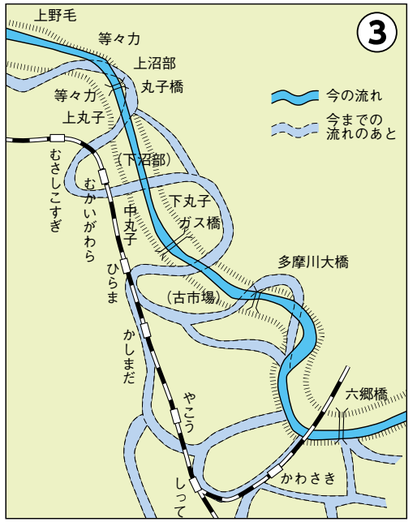
水がほしいなら多摩川の水があるのに…。



学習問題を考えてみよう

① およそ400年前、川崎に住んでいた農民たちは、米や野菜などを作って生活していました。そして、作った米の一部を、「年貢」としておさめなければなりませんでした。

このころ一つの村には家が７、８けんぐらいしかなく、土地もあれはてていました。



▲多摩川の流れの変化

昔から多摩川は、大雨がふるたびに川がはんらんして流れを変えるという「あばれ川」でした。


多摩川の近くに住んでいた農民たちは、どんな思いでくらしていたのかな。

②


▲用水ができる前の村の様子（想像図）

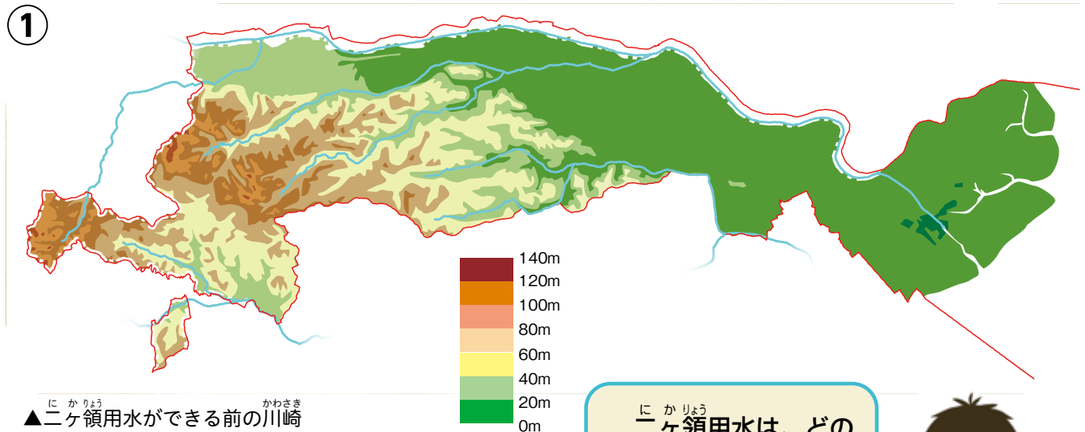

雨がずっとふらないとき、人々はどんなことを願っていたのかな。

④


▲小泉次大夫

農民たちの生活の様子を見た小泉次大夫は、つかえていた徳川家康に農民の生活をよくするために用水づくりを申し出ました。家康は次大夫に用水づくりを命じ、1597年に農民とともに用水づくりの作業を始めました。

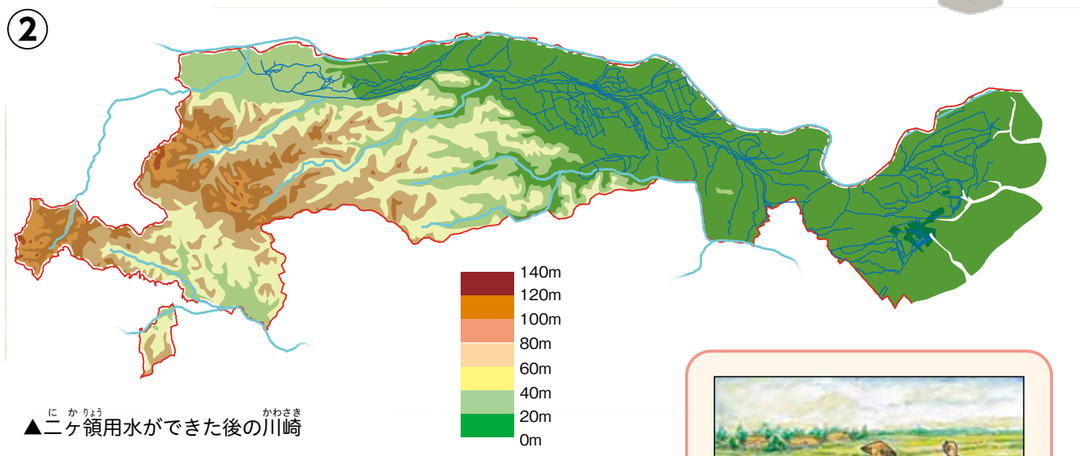
①



▲ニヶ領用水ができる前の川崎

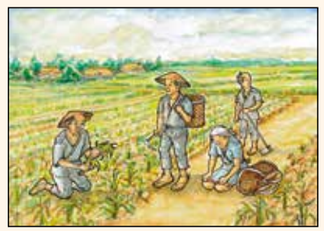

ニヶ領用水は、どのようなところを流れているでしょうか。

②



▲ニヶ領用水ができた後の川崎


平らなところでは、水は流れないはずだけど…。



どの村も、水をとてもほしがっているはずだよ。

学習問題を考えてみよう

次大夫たちは、土地の様子を調べ、用水路をつくる計画を立てましたが、ほとんど平らな土地のどこを掘ったらよいのかを決めるのがたいへんでした。そこで、雨水の流れを見て、昔、川が流れていたところをさがしました。また、土地の高いところや低いところなど、わずかな土地の高さのちがいを探したといわれています。１年10か月かけて測量し、水路を決めていきました。

二ヶ領用水には、「堰」という水の流れを分けたり、水の流れにいきおいをつけたりする施設がところどころにありました。

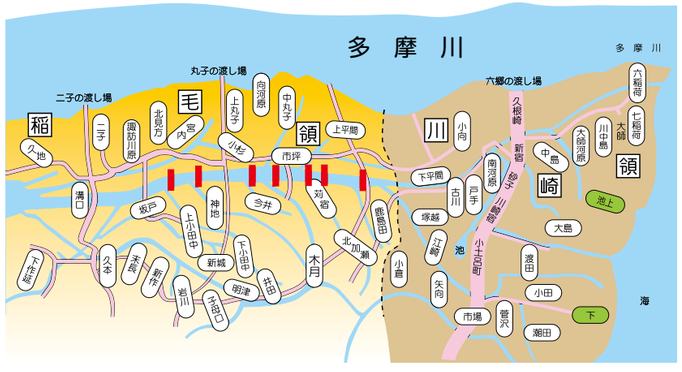
堰には、杭木堰（草堰）や蛇籠堰などがあります。稲毛領には、上流から井田堰、木月堰、今井堰、中丸子堰、上平間堰、苅宿堰、鹿島田堰の７つの堰があり、村々に水が行きわたるようにしていました。



▲杭木堰（草堰）の様子（想像図）



▲杭木堰（草堰）の様子（現在）



▲水を村々に分ける７つの堰（赤印が堰）　村　新田



下の資料を見てみましょう。
農民たちはどのように働いているでしょうか。

① 農民たちの二ヶ領用水工事の日程（『稲毛川崎二ヶ領用水事績』より作成）

農民たち	1/1			12/31
	1607年 1月1日～ 4月5日	4月6日～7月5日 用水工事	7月6日～ 10月1日	10月2日～ 12月20日 用水工事



農民たちの働き方とくらべて、小泉次大夫はどのように働いているかな。



② 小泉次大夫の働き方（『稲毛川崎二ヶ領用水事績』より作成）

小泉次大夫	1/1		12/31
	1607年　1月5日～ 12月20日 仕　　事		



学習問題を考えてみよう



小泉次大夫にかかわりがありそうなものを、下のイラストマップから見つけてみよう。



東京都側にも、小泉次大夫にかかわりがあるものがあるのは、なぜなのかな。

下の写真はイラストマップのどこの写真かな。





▲東京都世田谷区にある次大夫堀公園



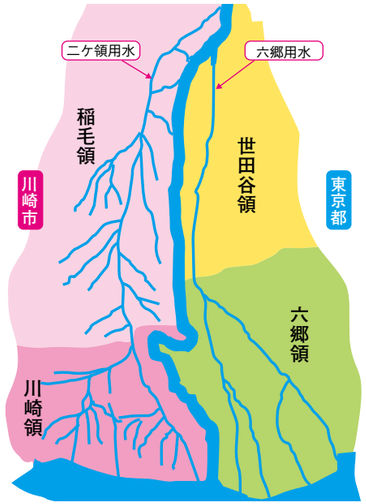
▲次大夫堀公園を流れる用水



▲多摩川周辺のイラストマップ

① 四ヶ領用水

二ヶ領用水は「稲毛領」と「川崎領」の二つの「領」を流れる用水なので、「二ヶ領用水」とよばれています。六郷用水は「世田谷領」と「六郷領」の二つの「領」を流れています。主に六郷領を流れたので「六郷用水」または「次大夫掘」ともいわれています。4つの「領」を流れているので、「四ヶ領用水」ともよばれています。





次大夫は、二ヶ領用水と六郷用水をどのように工事させているかな。下の資料から読み取ってみよう。

② 二ヶ領用水と六郷用水の工事の進め方（『稲毛川崎二ヶ領用水事績』より作成）

	1/1			12/31
六郷用水	1607年1月5日～4月5日 用水工事		7月6日～10月1日 用水工事	
二ヶ領用水		4月6日～7月5日 用水工事		10月2日～12月20日 用水工事

もっと短い期間で用水をつくることはできないのかな。



農民たちは、すぐにでも水がほしいのではないかな。



学習問題を考えてみよう

農民 1月1日～12月31日 用水の工事

一年中用水の工事をすれば完成は早いけど、農民たちのくらしはどうなってしまうのかな。



「あばれ川」だった多摩川にこまっていたのは、川崎の人だけだったのかな。

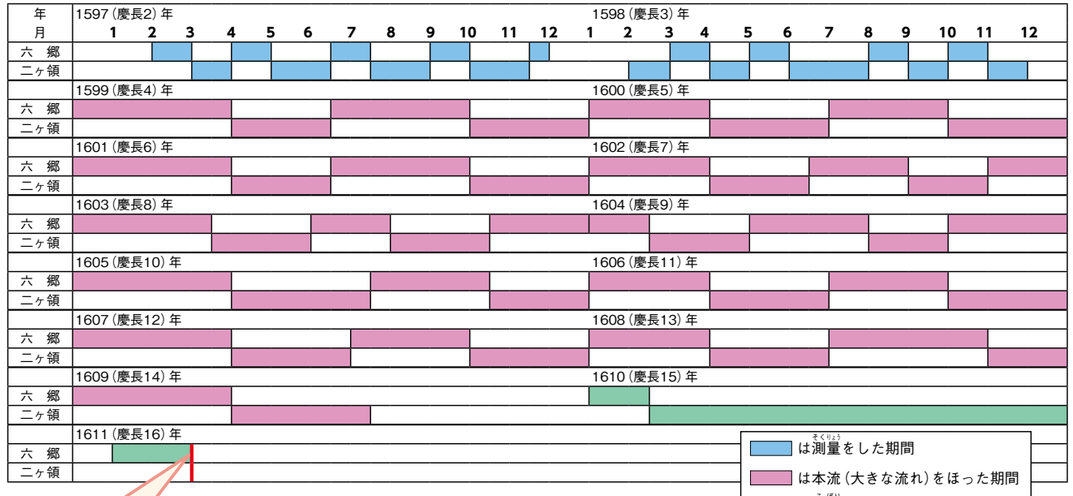




① 農民の一年の仕事

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
田の仕事	田んぼづくり			種まき	草取りや水の管理	田植え	草取りや水の管理		稲刈り	もみすり	たわらづめ(年貢)	
他の仕事	わらじづくり									野菜の種まき		

② 二ヶ領用水と六郷用水の工事日程（『小泉次大夫用水史料』より作成）



二ヶ領用水と六郷用水が完成した日

用　水	完成した日
六郷用水	1611年2月28日
二ヶ領用水	1611年3月1日

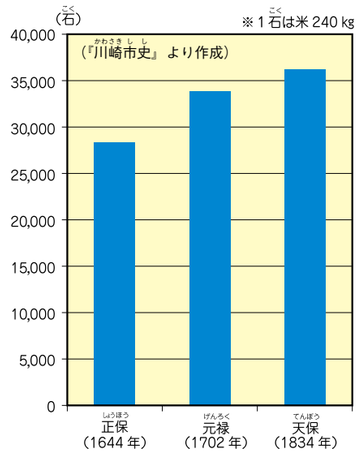
完成した日が１日しかちがわないよ。なぜ次大夫は、完成した日をほとんど同じにしたのかな。



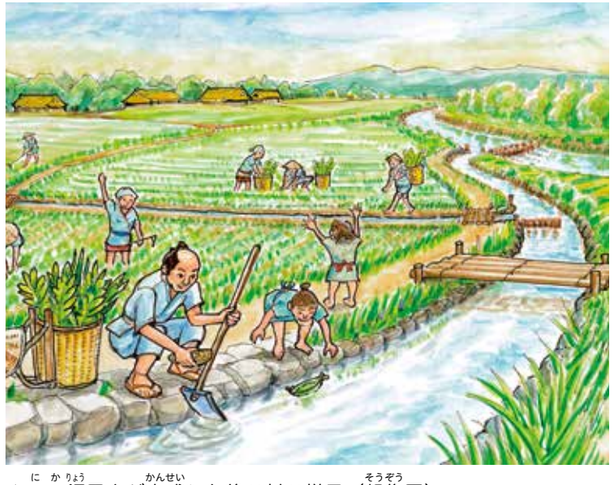


二ヶ領用水が完成して、人々のくらしはどのように変わったのでしょう。①のグラフやイラストから考えてみましょう。

①



▲川崎市の米の石高



▲二ヶ領用水が完成した後の村の様子（想像図）

② 100年後…



▲水をめぐって争う様子（想像図）

学習問題を考えてみよう

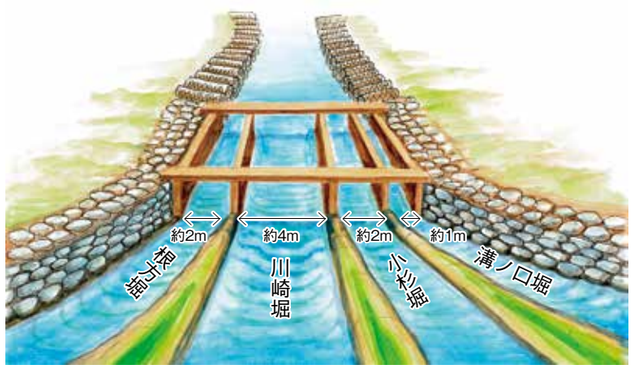
二ヶ領用水がつくられてから100年ほどたつと、用水路もこわれるところが出てきました。また、水田が増えたこともあり、水の流れが悪いところでは、村人たちが水をめぐって争うことがありました。

そこで、わたしがこの問題を解決しました。



▶田中休愚

①

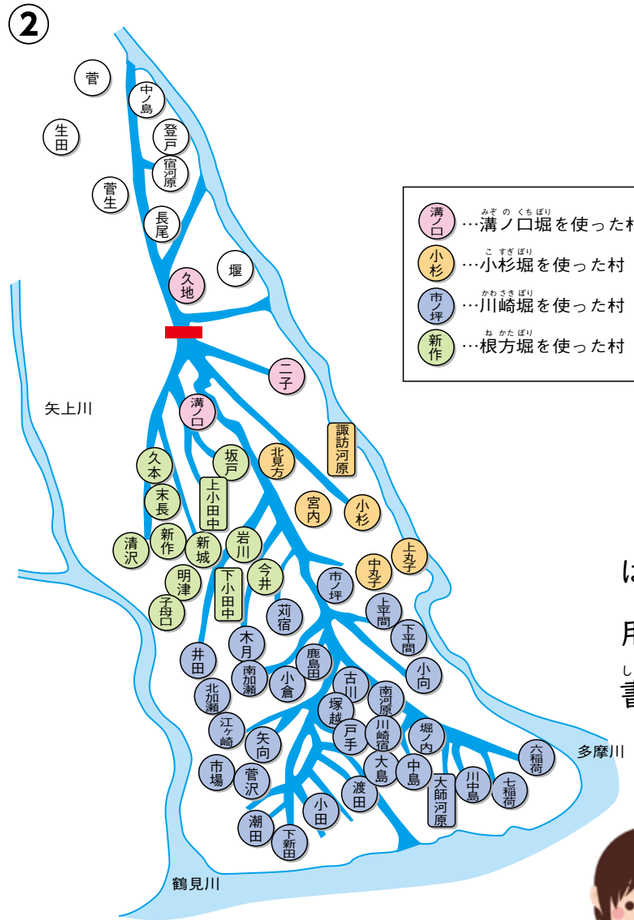


▲分量樋の仕組み

田中休愚は、公平に水が行きわたるようにするために、どのような仕組みを考えたのかな。



②



溝ノ口	…溝ノ口堀を使った村
小杉	…小杉堀を使った村
市ノ坪	…川崎堀を使った村
新作	…根方堀を使った村

▲それぞれの堀を使った村々（『川崎市史』より作成）

③

これからは互いにゆずり合い、水が行きとどくようにしましょう。

水が少ないときには、村々で争いを起こしてはいけません。

▲申渡書の主な内容（やさしくしたもの）

1725（享保10）年に田中休愚は、川崎と東京の両側の村々に、用水を使う約束として、「申渡書（御作法書）」を出しました。



分量樋を作ったり、申渡書を出したりしたことで、人々のくらしはどうなったのかな。

①



▲二ヶ領用水にかかる台和橋のレリーフ

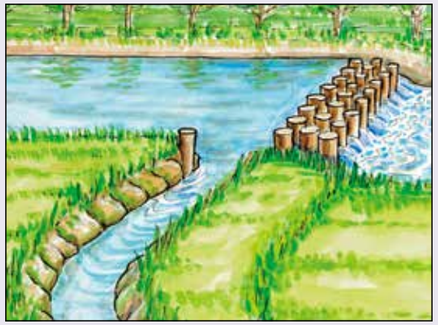


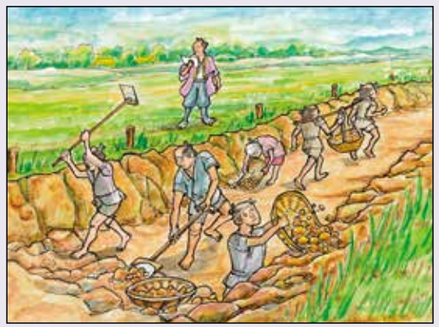


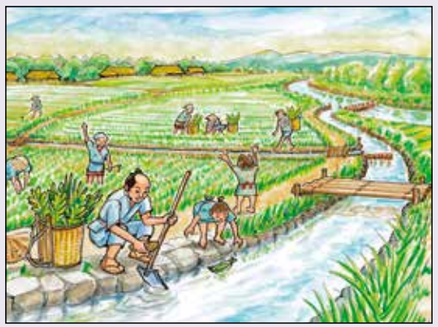
レリーフにある「川崎の育ての親二ヶ領用水」って、どんな意味なのかな。

②











レリーフに小泉次大夫が大きくかかげられているのは、なぜだと思いますか。

学習したことをふり返って考えてみましょう。